

家庭の温もりの中で得たもの

里子を迎入れたことにより、里親や他の家族はどう感じているのか。2つの里親家庭の話をご紹介します。

里親



山森 志乃ぶさん(45歳) 山森 理宏さん(50歳)

市内在住の山森さんは現在、夫婦2人と実子5人、理宏さんの両親、里子1人の計10人家族。平成23年から里親となり今年で8年目。最長で5年半、短期で数日間など、これまで5人の里子を迎入れ共に生活してきた。

私たちにできる限り子どもたちを家庭で育てていく

里親としてできる限りのことをしようと決意

我が家が里子として子どもを迎え入れたのは、今から8年前になります。困っている子どもがいることを知って、見過ごすことができませんでした。5人の子育てをしている経験もあり、「なんとかやる。何かできることをしよう」と、里親になりました。

里親になるために私たちは、名張養護学園で研修を受けました。施設では、職員の方々が常に子どもたちのこ

とを考えてくれていたことが分かりました。しかし、勤務時間が終われば大半の職員は帰宅されます。常に同じ人が子どものそばにいないというわけではないということを感じたのです。

そして、研修期間が終わわり施設を出る時、何人かの子どもたちが、私たちとの別れを惜しんでくれました。この研修で施設での子どもたちのことを知り、里親としてできる限りのことをしようとあらためて決意しました。

試行錯誤の里親 子どもの笑顔がやりがい

これまで我が家で預かった子どもは全員で5人。一番長く5年半生活を共にした子や児童養護施設からの依頼で週末だけなどの短期間で預かった子もいました。

我が子も含め子どもたちはそれぞれ個性や性格が異なります。子どもに対してどう接するのかなど、毎日が試行錯誤の繰り返しです。一つ屋根の下で生活すると壁にぶつかることも多くあります。それでも、我が子と里子たちの楽しそうな笑顔を見ると、里親をやって良かったと思えます。だから今まで続けてくることができました。

里親になってからも大勢の人が支えてくれます。里親会のサロンやイベントなどでは、他の里親の皆さんと交流できますし、名張養護学園の里親支援専門相談員さんも定期的に訪問してくれます。困ったことがあっても相談できる相手が身近にいたので安心ですね。

地域の皆さんには、里親制度のことや誰かの支えを必要としている子どもがいることを知ってほしいと思います。そして、子どもたちをやさしく見守ってほしいです。それだけで、私たち里親も子どもたちも安心できます。

共に暮らした経験が 少女の未来を決めた

この話は、平成26年に名張で開催した里親入門講座で参加者の皆さんに体験談を語ってくれた三重県在住の殿村ひなさん(当時18歳)のメッセージです(一部抜粋)。

殿村さん一家は父、母、長女、長男、次女、三女、祖父、祖母の8人家族に里子の弟、妹を加えた10人家族。ひなさんはこの家の長女です。

私と弟は両親の里親への想いに反対していました。両親は悩み何度も私たちと話し合いました。両親の想いはよく理解できたし、子ども心ながら「きつといい事なんだろう…」という思いにはなったのですが、それでも私たちの考えはあまり変わりませんでした。

そんな思いを変えたのが東日本大震災でした。連日報道される内容に心を痛めていた頃、児童相談所から里子の委託の話があり、私たち兄弟のために職員の方が家まで来て里親制度の意義などを説明してくれました。震災とは関係なかった依頼ですが、私たちは受け入れたいと即答し、7月から新たに1人の男の子が家族になりました。

最初は言葉も少なくさみしげな表情をしている子どもでした。かみ付く、たたく、物を投げる、それに対して私たちが注意をすると、一点を見つめて固まったり、泣き叫んだりしましたが、私たちは「生まれてきてくれてありがとう」と声をかけ、優しく見守りました。すると行動も少しずつ治まり、声を上げて笑うようになりました。今では私たちを和ませてくれる大切な存在です。

1年半が経った頃、新たにもう1人女の子が家族になりました。彼女は弟と違い、家庭内の盗みや兄弟へのいじめなど、一時的に家庭内で緊張感が漂いましたが、そのたびに母が話し合いをして、今では笑顔で過ごす時間も多くなりました。兄弟の面倒もよく見てくれるし、同級生の妹とも仲良く過ごしています。

私は、里子として我が家にやってきた二人が家族になろうと頑張りと、悩む姿を目の当たりにしてきました。姉として二人をサポートする、または二人と同じような環境に育つ子どもたちを守る大人になるにはどんな資格や勉強が役に立つのかを考えた結果、看護師を目指そうと思いました。

彼らと共に育った経験を生かし、家庭に恵まれない子どもたちを助けられる大人になれるよう、これからも努力していきたいと思っています。

